

GF EVENT

講演会と作品展

ワタナベ・コウさん講演会「『裁縫する女』のジェンダー・ポリティクス」

服装家、漫画家、イラストレーターであるワタナベ・コウさんの講演会と作品展が開催されました

ワタナベ・コウさんの講演会が2014年10月21日(火)にE棟のコンベンションホールで開催されました。テーマは「『裁縫する女』のジェンダー・ポリティクス」です。講演内容についてご報告します。

内容は主に以下の3つでした。

1つ目はワタナベ・コウさんの目を見た「裁縫の歴史」です。

家族の衣服は昔から妻または母が裁縫をして作ってきました。明治時代に戦争がはじまると、裁縫は教科として女子に教えられました。戦後は洋裁学校ブームが起り、家庭で洋服が作られるようになります。1970年頃には既製服の数が家庭で裁縫し自作した服の数を上回りました。

2つ目はワタナベ・コウさんと「裁縫の関係」です。既製服がこんなに安くある時代にコウさんはなぜ服を自分で作るのでしょうか?

それは「自己表現」だからです。コウさんは絵も描き、文章も書き、雑誌も作っており、裁縫も自己表現の1つなのです。コウさんはまた「先生」として裁縫を教えています。裁縫を通していろいろな人と接することで、様々の視点を持つことができます。さらには裁縫の先にあるデザインや衣服と人間の関係性などを探求できます。コミュニケーションのツールにもなります。不必要なものを作って売り続ける「資本主義への小さな抵抗」でもあるとのことでした。

3つ目はワタナベ・コウさんが教えている「裁縫」です。

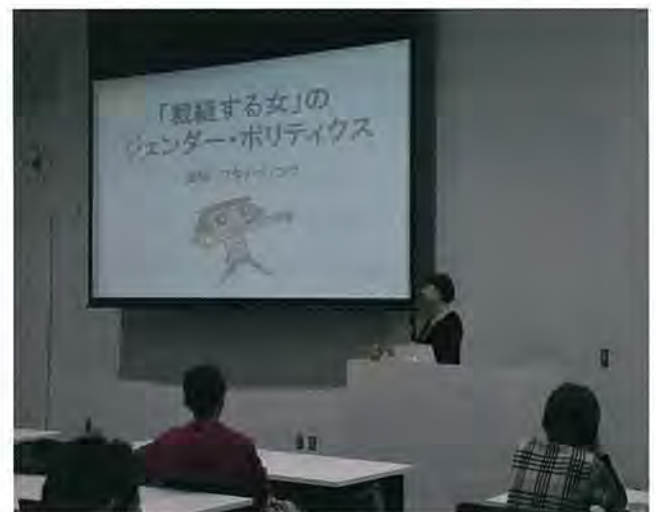
服は誰にでも作れる!と1日でも縫える作り方が紹介されました。縫い代つきの型紙を使い、しつけ・印なしのとても効率的な方法です。また、布の選び方や、1つの型紙を使いまわすなど実践的なアドバイスもありました。

私は裁縫が趣味で、以前からコウさんのファンです。私も裁縫をする理由を長い間考えてきました。何かヒントが見つ

かるかもしれないと、この講演会に参加しました。コウさんと「裁縫の関係」を聞いて、腑に落ちるものがありました。これからも楽しく裁縫を続けます。コウさんからは個人的に「一度サイズをきちんと測った方がいいですよ」とのアドバイスを頂きました。実に有意義な、私にとっては特別な講演会になりました。

裁縫をめんどくさいものと捉えている人はたくさんいらっしゃると思います。確かに家庭科で習った裁縫は不必要に手順が多く、作り上げるまでに長い時間がかかりました。でもコウさんの教えていらっしゃる裁縫は簡単です。面白いです。裁縫とは縁のない方、ひょっとして損をしているかもしれません。一度試してみることをお勧めします。

お話はもちろん、とても興味深いレジメも配布してくださいました。ワタナベ・コウさん、講演会を開催して下さったジェンダーフォーラムの皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。(加藤知香・講演会参加者)



▲ワタナベ・コウさんの講演風景



▲梅根記念室での作品展風景

GF EVENT

宮崎かすみ著『オスカー・ワイルド〜「犯罪者」にして芸術家』

GF読書会の輪読とブックトークで学んだこと

後期の読書会では、11月11日から12月9日にかけて、宮崎かすみさんの『オスカー・ワイルド』（中公新書、2013年）を輪読しました。オスカー・ワイルドといえば、『サロメ』や『幸福な王子』の著者として有名ですが、胸に突き刺さるような名言、警句を残した人物としてご存知の方も多いかもかもしれません。私の



ワイルドに関する認識は、「愛と美に生きた人」という程度でしたが、本を読み進むにつれ、愛や人生に関する皮肉めいた言葉や、機知に富んだ社会風刺の言葉を紡いだ、彼のバックグラウンドを知ることができました。

何と言っても、ワイルドの魅力は、彼自身が「私は人生にこそ精魂をつぎ込んだが、作品には才能しか注がなかった」と語っているように、起伏に富んだ実生活。英国刑法のラブシエ条項（1885年成立）によって、ソドミーだけでなく、それに至らない男性間の性的行為も有罪となったこの時代に、副題通り「犯罪者」となったワイルドは、数々の男性と浮名を流し、現代で言うダメ男（？）ダグラスとの熱烈な恋に溺れます（妻と子どもの犠牲の裏で！）。あまりに芸術家らしい（？）ワイルドにたじろぎながらも、読書会では、本書の冷静な語り口に励まされながら、英国の文化的特色、社会制度、同性愛への認識、社会階層の問題など、様々な切り口で議論がなされました。

1月13日（火）には、著者である宮崎先生をお招きし、ブックトークが開催されました。まずは、ワイルドの伝記的映画である「オスカー・ワイルド」（1997年）を鑑賞。余談で

すが、ダグラスを演じたジュード・ロウの美しさには、わがまま放題のキャラクターと相まって、目を見張るものがありました。ブックトークでは、ワイルドの思想性や、ラブシエ条項の実際、19世紀後半からの同性愛の医療化／病理化について、ワイルドやダグラスの金銭感覚、中流階級の価値観など、宮崎先生に詳しく質問にお答え頂き、よりワイルドの姿に迫ることができました。ワイルドの作品や人生を知ると、どうしてもゴシップ的な面にばかり目がいきがちですが、イギリスをはじめ、ホモソーシャルな同盟の中で、どのようにセクシュアリティが扱われてきたのか、深く考えるきっかけになりました。

今年度の後期から参加させて頂いているGF読書会。まだまだ若輩者ですが、これからも良質な本と出会いや、魅力溢れるメンバーの方々の議論を楽しみに、学びを進めたいと思っています。
（渡邊愛里・GF読書会参加者）



▲読書会の様子

GF EVENT

和光フェスティバルで「GFおにぎり屋」を出店して

和光フェスティバル「GFおにぎり屋」出店をめぐって(1)

2014年11月2日（日）に行われた大学主催イベント「和光フェスティバル」（以下：ワコフェス）に参加しました。私たちが出店したのはおにぎり屋でした。おにぎり屋の企画は大学内の施設「ジェンダーフリースペース」で立ち上がったもので、2014年8月から大学生協前の通称「和光銀座」で定期的に行われていたものでした。

おにぎり屋を始めた頃にワコフェスについて知り、出店して知名度を上げようと思ったのですが、出店するまでには数々の課題がありました。

まず、少人数に商品を買っていた和光銀座に対して、ワコフェスでは多人数に商品を買わなくてはならないため、人員が必要になりました。おにぎり屋はサークル活動としてではなく個人で行っていたため、新たに手伝ってくれる人を集め

おにぎり女子の活躍とその悲哀

和光フェスティバル「GFおにぎり屋」出店をめぐって(2)

ることは困難でした。サークルならあらかじめ人数が集まっていますが、個人ではまず人集めから始めることになりま。私には多くの人手を集めるほどの人脈がなく、ワコフェス当日はたったの4人でおにぎり屋を切り盛りすることになりました。

さらに、大学主催のワコフェスはスケジュールが徹底して組まれており、加えてワコフェス委員会の仕事も請けおわなければならない、それと並行しておにぎり屋の仕事を進めることも課題の1つでした。

そして、いちばん困ったのがおにぎり屋の方向性です。和光銀座の頃は純粋な利益目的として行っていたのですが、ワコフェスではどういった方向性で商品売ったらよいか、迷いました。ワコフェスでは先生方にお米と無料で野菜を提供して頂きました。そのため「提供してもらった野菜をすべて使い切らなければ、先生たちの誠意に答えたことにはならない」という意見が仲間から出ました。私はその意見に同意し、また、安く商品売らなくては材料全てを使い切ることとは不可能だろうと考えました。

このように多くの課題を抱えてワコフェスに参加しました。結果として赤字にはなったのですが、反省点が多かったことも事実です。何よりの反省は、薄利多売の形式をとらざるを得ない状況になってしまったことです。4人体制で安く商品売することは1人当たりの肉体的負担を上げることになります。次善の策として高い値段で売ることによって1人当たりの負担を下げるべきでした。これで最終的に商品が売れ残ったとしても4人で現物給与として分配すれば良かったと思います。

おにぎり屋の課題は残りましたが、ワコフェスがサークルや和光職員の方々などとの新しい出会いを与えてくれました。そして3年間の大学生活で出会った人たちとの親睦を深めるきっかけになったと思います。

(田中亨・経済経営学部経済学科3年)



▲「おにぎり屋」店長の田中さん(左)と、GFおにぎり屋の出店風景(右)

私には、妙な癖がある。それは、おにぎりなどの調理系の企画が持ち上がったときに、ここぞとばかり、自分の出番だと張り切ってしまう癖である。「だてに主婦をやっていないのよ」という自負がそうさせるのか。

学生たちから、和光大学フェスティバルで「GFおにぎり屋」をやりたいという話を持ち掛けられたときには、すでに決意をしていた。学生たちが、おにぎりの試作をする様子を見たが、どうにも手つきが覚束ない。

「まかせておいて。おばさんが手伝ってあげる」

準備は前日から始まった。和光大学の2人の先生のご実家から食材を提供していただき、トン汁や、副菜の仕込みを行う。大鍋にあふれるばかりの具材をぐつぐつと煮込む。そして当日は、朝からご飯を炊き、ひたすらおにぎりを握った。フェスティバル会場で、我々のおにぎりが飛ぶように売れたらしい。「らしい」というのは、私はおにぎりを握るのに忙しくて、一歩も外に出ておらず、どれほど盛況であったかを知らないのだ。

「全部売れたから追加お願いします」という電話が入る。炊飯器を3台フル稼働させて、7キロ分のお米をすべておにぎりにして売り切った。まさにうれしい悲鳴。シンプルな塩にぎりが、大好評だったそうだ。ジェンダーフォーラムの宣伝にもなったようで、少しばかりだが利益も出たそうだ。万事うまくいった。よかった。よく働けたという達成感がなんだか心地よい。

しかし、今回も張り切りすぎて、私は疲れ切ってしまった。性も根も尽き果てたというべきか。体が痛くて、その夜はシップを体中にペタペタ貼った。

フェスティバルの翌日は、主婦仲間との女子会だった。友人から「ねえ、疲れていない？」と心配される。「実はね。昨日ね。かくかくしかじか……」という私の話から、母親たちが子どもの部活の合宿に同行し、三度の食事を作ったなどの体験が語られ、「おにぎりネタ」でひとしきり盛り上がった。

しかし「結局、私たちは、おにぎりを握ることを期待されているのよ。疲れるけどね」という友人のぼつりとした一言で、私たち「おにぎり女子」は、なぜかみんなして黙り込んでしまった。(阿野理香・ジェンダーフォーラムスタッフ)

深く複雑な 「おにぎり女子」の労働評価問題

和光フェスティバル「GFおにぎり屋」出店をめぐって(3)

おにぎり屋のご成功、おめでとうございます。男性がことを起こすとき、しばしば必要とされるのが背後でおにぎりをつくる女性です。今回も、そんなおにぎり女子の大活躍が、成功を支えたようですね。ただ問題は、その労賃がコスト計算から除外されることが、あまりに多い点です。

せっかくの好意に甘えてもいいんじゃない？ と思う気持ちはわかります。でも、おにぎり女子に本音を聞いてみると、複雑な思いが見えてくるのが少なくありません。

古くは1960年代末、学生がバリケードなるものを築いて大学にたてこもっていたころの体験を、元女子学生たちに聞いたことがあります。「男子学生が警官と戦っている間、同じ活動家だったのに私たちはおにぎりをつくらされた」と何十年も立っているのに怨念を込めて言うのです。東日本大震災時も、避難所でおにぎりを握り続け、疲弊したと訴える被災女性の声を聞きました。

おにぎりに象徴されるように、女性たちの働きはしばしば無償の行為として賃金コストから除外されます。「無償で大丈夫？」「いくらならいい？」といった質問で、女性たちが救われることも多いようです。起業に必要な小さなジェンダー配慮のコスト計算です。 (竹信三恵子・現代社会学科)

「これって、デートDV？」

デートDV防止啓発講座、参加者の感想を紹介します

町田市男女平等推進センターによるデートDV防止啓発講座が、2014年11月13日(木・5限)に和光大学で行われました。徳永貴志先生の「法と人権」の受講者を中心に160人以上が参加しました。講師は、去年に引き続き、深沢泰子さん(アウェア認定ファシリテーター)。安心して聴ける雰囲気なかで、緊張するテーマをわかりやすく取り上げて下さいました。参加した学生の感想の一部を紹介します。

私が高校生のころ、デートDVの関係にあるようなカップルがいました。彼女のほうは、やはり「愛してくれているから」こそその暴力だと言っていました。そう言われてしまうと、第三者が干渉しにくいというのもデートDVの特徴だと思います。ずっと彼女の気持ちがい不思議でしたが、ジェンダーバイアスと

結びつけて考えると、男性は男性で、女性は女性でかたよった「らしさ」を内面化してしまっていることが要因なのか、と少しわかったような気がしました。

指導・しつけの名目で相手を支配するというのが、会社や家庭など様々な場面で行われている今の社会で生活している私たちは、暴力に慣れてしまっているということに今まで気づいていなかったが、確かにと思われ、少し悲しくなった。(中略)途中で「(いまの政権は)『平和を守るんだ』と言いながら戦争をしようとしている」と言っていたが、その「積極的平和主義」は、最初から力で押さえつけておけば争いそのものが起きないという「DVの加害者っぽい」考え方だと気づかされ、いまの政権・社会に改めて腹が立った。

親密になればなるほど「ルール」「マナー」「モラル」というものが大切であると感じました。親密になったからといって、それらがどうしてもよくなるものではなく、親密ではない人よりも、もしかしたら大切なかもしれないと感じました。私は趣味で○○をやっています。私は指導をする立場にあり、メンバーに怒ったりすることも少しあります。指導という立場になってしまえば、怒りの感情が出てきてしまうし、多少は攻撃的になってしまうこともあります。今回の講演を聴いて、交際している関係ではないけれど、言われるメンバーの側に立って、攻撃的な感情ではない、よりよい道を選択したいと思いました。

DVに関する映像をみて、過去の自分を見ているようだと思います。もう過去の話にはなりませんが、思い返してみるとけっこう傷ついていたなと思います。自分には甘いくせにつきあっている相手には厳しい人は、その人なりに好きな相手を思っているのかもしれませんが、表現の仕方が間違っているのだなと思いました。別れてからもう5年くらい経ちますが、向こうも少し落ち着いてきたので、つきあっていた頃どう思っていたかを聞きました。そこで初めてどう思っていたのかを知り、話し合うことの大切さ、怒らずに言葉で伝え合うことの大切さを思いました。

(杉浦郁子・現代社会学科)



▲講座の様子

2014年度卒論発表会

2014年1月21日（水）にジェンダーフォーラム主催の卒論発表会を開催し、今年度は4名の4年生が報告をしました。発表の内容を簡単に紹介します（発表順）。

（1）西山純子さん（総合文化学科）『ジブリアニメとジェンダー』

西山さんは、宮崎駿『魔女の宅急便』の主人公キキを観察することで、宮崎作品における「少女」観を分析しました。この作品を含め、宮崎作品では、初潮を迎える手前くらいの少女（子どもと大人の境界）がよく題材にされます。西山さんは、彼女たちの外見は「子ども」なのに中身は「子どもらしくないこと」、つまり意志が強く「母性」的な包容力を見せることに注目します。主人公には「親の不在」という共通点があり、それが「子どもらしくない子ども」を理解可能なかたちで創出しているのですが、このような主人公のキャラクターには、親からの自立を重視する宮崎駿からのメッセージが込められている、というのが西山さんの考察です。以上のような分析や考察も興味深いものでしたし、加えて、宮崎作品に埋め込まれた「性的なメタファー」を読み込む作業の面白さに魅かれました。

（2）小山藍さん（現代社会学科）『Xジェンダーにおける生きづらさとその将来展望』

小山さんは、「X」ないし「Xジェンダー」というカテゴリーで自らを表現する人々にインタビューを行い、かれらがどのような生きづらさを抱えているのか、どのような将来展望をもっているのかについて考察を行いました。「性別は男か女かの2種類である」という性規範が根強い現代日本では、「男」ないし「女」以外のジェンダー・アイデンティティをもつ人々は、さまざまな社会領域や生活場面で困難に直面します。小山さんは、Xジェンダーの困難のありようを具体的に記述し、さらに「X」というカテゴリーの認知度の低さから、自分は何者かを模索する期間が長くなってしまふことの問題性も指摘しています。「X」という社会的カテゴリーにたどり着き、それに同一化し、それを使って自分自身の状況を客観的に整理できたことによって、前向きな将来展望を描けるようになったケースも報告され、「自己」という現象の社会性を再認識しました。

（3）上原ななみさん（心理教育学科）『性別違和を訴える児童の現状と学校の対応について』

性同一性障害の人々に対する医療や法律の制度が整ってから、性別違和を抱える人々の生活課題が少しずつ一般に知ら

れるようになりました。当事者の多くは、かなり幼いころから性別違和を自覚していた、と振り返りますが、児童（小学生）の性別違和に関することはほとんどわかっていません。そのため、上原さんは、性別違和を訴える児童の現状把握とともに、学校でどのような対応をしているのか、そこでの課題は何か、性別違和を授業で取り扱う際の難しさは何かなどについて、文献や文科省の調査資料などを使ってまとめました。部外者が小学校のなかで起こっていることを調べる難しさをあらためて感じましたが、上原さんは大学院でもこのテーマに引き続き取り組んでいく予定だそうです。研究の進展が楽しみです。

（4）馬場真裕さん（経済学科）『青少年への適切な早期性教育～インターネットの普及により増加した性知識への対応』

馬場さんは、日本の小・中・高等学校で現在行われている性教育が生殖（避妊）や性感染症予防の内容に偏っているという問題を指摘し、今後は青少年の心身の健康を促進するという視点から、性教育の内容や指導法を切り替えていかなければならないと、卒論で主張しました。大西公恵先生からは、性教育は「人がどう生きるか」にかかわる問題を扱う領域であるため、「何を教えるのか」「“科学”としてどう教えるのか」「教え方や内容をどのように規定するのか」が難しい教育内容であることが指摘されました。また、たとえ優れたナショナル・カリキュラムができたとしても、地域差など子どもの置かれた環境によって対応は変わってきます。そのような状況の中で、日々模索しながら現場で行われている教育実践を検討することが重要である、といった課題が指摘され、有意義な議論の場となりました。

発表者の所属学科がさまざま、ジェンダー／セクシュアリティの問題に興味をもってきている学生の広がりを感じることができた発表会でした。（杉浦郁子・現代社会学科）



▲ジェンダーフリースペースにて

「フィールドで学ぶ」 現地スタディツアー報告

現代社会学科の授業「フィールドで学ぶ」で実施した海外スタディツアーに総勢22名で行って来ました。

2014年度の学習テーマは「サンフランシスコのLGBTコミュニティの歴史と現在」。9月2日から約10日間、サンフランシスコのゲイタウン「カストロ地区」を訪問したり、少数者のまち作りを支える思想や実践を学ぶために他のコミュニティを訪問したりしました。



▲ハーベイ・ミルク・プラザ（カストロ地区）

現地ツアーでは、見聞きしたことについてメモをとること、「ふりかえりミーティング」を開きそこでの議論を記録すること、ジャーナル（日誌）をつけることを課しました。そうしたフィールドノートや録音データ、写真、施設でもらったリーフレットなどを活用してツアー報告を書き、『サンフランシスコ・ベイエリアのコミュニティづくりに学ぶ～LGBTコミュニティを中心に』というタイトルの冊子を作成しました。110ページの労作です。

また、学内発信として、展示スペース「梅根記念室」で写真展を実施しました（2014年12月13日～2015年1月9日）。36枚の写真にキャプションと説明文をつけ、展示しました。

報告書と写真展の展示作品は、現代社会学科のブログでご覧いただけます。ぜひのぞいてみてください。

（杉浦郁子・現代社会学科）

CINEMA REVIEW

『レッドマリア～それでも女は生きていく』

韓国・日本・フィリピンの社会の辺境で働く女性たち——家事労働者から、性労働者、非正規労働者、移住労働者、介護労働者、フィリピンの元「慰安婦」たち、そしてホームレスと

しての生活を選択して生きる日本の女性。グローバリズムと高度資本主義の中で社会の周縁部に追いやられながらも、たくましく生きるアジアの女性たちの姿を、ときには寄り添い、ときには共に怒り、ときには涙しながら見つめた映画です。

韓国で300万人以上が見た大ヒット・ドキュメンタリー映画『牛の鈴音』の製作者が制作を支え、『ショッキング・ファミリー』などで知られる韓国人女性監督、キョンスンが、この生きづらい世界の中で、いかに女たちが体を張って生きているかを描き出した女性讃歌ともいえる映画を、和光でも上映します。ぜひご参加ください。（竹信三恵子・現代社会学科）

GF SCHEDULE

GFのイベントと読書会のお知らせ

2015年度公開講座

- ① 映画『レッドマリア』上映会＋市民講座
 - ・映画『レッドマリア』上映会
 - ・日時：5月9日（土）10:40～
 - ・市民講座『レッドマリア』映画解説
 - ・解説者：竹信三恵子さん（本学現代社会学科教授）
 - ・日時：5月16日（土）10:40～
- ② 市民講座
 - ・講師：内田雅克さん（東北芸術工科大学教授）
 - ・日時：6月20日（土）10:40～

*公開講座は、どなたでも参加できます。参加費無料。

GF読書会

毎週火曜日13:00～ 於：ジェンダーフリースペース
初回開始日 2015年4月21日（火）

テキスト

- ① 『何を怖れる～フェミニズムを生きた女たち』松井久子
編、岩波書店、2014年
- ② 『大日本帝国の「少年」と「男性性」～少年少女雑誌に見る「ウィークネス・フォビア」』内田雅克著、明石書店、2010年

GF読書会主催ブックトーク「内田雅克さんの著書を読む」

日時：6月20日（土）午後 於：ジェンダーフリースペース

*GF読書会は、学内外を問わず、どなたでも参加できます。ただし、参加に当たっては、いくつかのお願いをする場合がございます。

*ジェンダーフォーラムの活動に関すること、GF読書会に関するごとの問い合わせ先：和光大学ジェンダーフォーラム gen-free@wako.ac.jp（阿野）